

高大連携に基づいた、生徒自身の学習観刷新を目的とした学習活動

◆ 所属・提案者（◎代表者）

県立大宮高等学校

◎新妻 英昭

ねらい

高校には受験対策をベースにした進路指導とキャリア設計をベースにした進路指導との両立に課題があり、その結果、高校卒業後大学に入学しても、受け身である傾向がぬぐえない。そこで、探求的な学びを率先して実践している卒業生ならびに大学・大学院生との協働的な学びを行うことで、探求的な学びと高校在学現在の学びとを相対化することで、生徒の学習観を調整し、適正な進路実現を支援する実践である。

実践内容

【1年】

（内容）①教育実習生（本校卒業生・大学4年生）から、キャリア設計についてインタビューを行い、人物紹介の記事を作成する。
②大学院生から、①と同様のテーマでインタビューを行い、内容をまとめてポスターセッション形式で発表する。資料①
（評価例）インタビューした内容を、正しくかつ効果的に表現できている。

【2年】

（内容）【修学旅行の探求活動】【文化部の研究結果】【理数科設定科目「課題研究」の成果】【個人による探求活動】をまとめ、プレゼンテーション、ポスターセッション形式で発表する。同時に、大学院生による研究発表を同会場で受ける。資料②・③
（評価例）具体的な課題を設定・探求し、またその成果を正しくかつ効果的に表現できている。
大学院生の発表を聞き、研究の方法やテーマ設定の仕方について適切に把握できている。

【3年】

（ねらい）「研究とは何か」（高校の学びとの違いは何か・その方法論は・どのようなものが評価されるか・どのように課題設定するか等）を考察する。

【第1回：導入①】

（内容）①生徒各自が現在イメージしている「研究とは何か」を考察し、まとめる。
②卒業生より提供を受けた卒業論文・修士論文を読み、研究の過程を分析する。

【第2・3回 展開】大学生・大学院生によるレクチャーを受け、探求的な学びのイメージを理解する。

（内容）①大学生・大学院生から、現在の具体的な研究テーマの解説を受ける。
②生徒はグループをつくり、①の研究について、実際にどのような方法で研究するか・どのような観点で課題設定すると研究ができるのか等を分析考察し、発表する。資料④
※実践時には、テーマを変えて2回にわたり同様の活動を行い、複数の方法を比べた。

【第4回 展開②】研究テーマの提供を受け、高校生自身で探求する方法を考える。

（内容）①学生により、生徒に研究を計画させるテーマを考案してもらう。資料③
②生徒は①から関心があるテーマを選び、【第2・3回】と同様の方法で、研究計画を分析考察し、発表する。資料⑤
※学生は発表資料を持ち帰り、第5回に向けて評価をしてもらう。
※【第2～4回】では、グループ発表の後、大学生・大学院生、教諭による振り返りを行う。

【第5回 まとめ】活動全体を振り返り、「高校の学びと大学の研究の違い」を考察する。

（内容）大学生・大学院生によるパネルディスカッションを行う。資料⑥
①大学生・大学院生が【第4回】の発表資料から、「面白い」と思ったものについて、プレゼンテーションを行う。
②大学生・大学院生同士で、プレゼン内容について質問意見等を受け、ディスカッションする。
③紹介された生徒は大学生・大学院生からの質問・コメントを受けて受け答えをする。
④そのほかの生徒はワークシートを記入しながら参加する。資料⑦
（評価例）大学生・大学院生と共同で、研究の課題設定や方法を考察したうえで、新たな視点から研究課題を設定し、探究活動の構想が正しくかつ具体的にできている。

高校1年～3年9月～11月まで断続的に
(生徒の感想録ではもっと早期からの実施を望む声が複数上がった)

実践の成果や課題

(成果)

- ①教科指導を超えて、探求的な学びができ、学び方を多様に理解することができた。
- ②大学入学後、就職のほかにも大学院進学など、多様な進路がかなえられるイメージを持つことができた。

(大学生・大学院生が高校で今回のような活動を行うことのメリット・意義)

- ①自分の研究方法の相対化。
- ②高校生に伝えることを通じた、アウトプットの経験。
- ③共同的な探究的活動になるのならば、当の高校生が研究対象となる場合を考えてもいいかもしれない。
(インタビュー調査・アンケート調査の対象として、行動分析のサンプルとして)
- ④高校生との学びをともに行うことによって得られた研究成果を高校生に還元できればなおよい。

(課題) たとえば研究室体験のような、特定の研究についてレクチャーされ、見学するだけの活動では、オープンキャンパス参加等と変わらないため、高校生と学生が相互に異なる負荷を受けつつ活動するような協働的な授業をねらったが、導入時、双方に授業のねらいや活動の利点が説明しづらい。

失敗しないための方策

- ・生徒に活動をわかりやすくするには、特定の研究分野に限定したほうがよい。例えば、純粋な理学は高校生にとって追体験不能なことが多かったです。
- ・大学側とコミュニケーションを取る際、連携の前段階として、高校の方がむしろ大学・大学院について正しく知る機会を持たねばならないように思います。(大学へ具体的な依頼を行うために。大学側からの提案を理解するために。)

他校で導入するポイント

- ・それぞれの学年、それぞれの実施回は、単独の学習活動として完結するように設計しているので、すべてを実践する必要はなく、自校生徒の実情に合わせて学習を設定すればよいと思います。
- ・高校の人数規模の把握&必要とする大学生/大学院生の人数の設定。
学生をひとりでも多く確保することが望ましい。
一人の学生に対して、40人を超える生徒では対応が難しいと思います。
- ・研究内容のレベルを調整する。また、研究計画テーマについても、高校までに既習の内容から少しだけ背伸びする程度に、難しいことへ挑戦するぐらいがよいのかもしれない。

セールスポイント

- ①高大連携のモデルケースとして考えられる。 資料⑧
- ②高大接続改革に向けて、生徒の探究的な学習を通じて対応できる。
※特に、情報伝達の形で大学の学びを講義する内容ではなく、体験活動として学習させることができる点。
- ③常に学生に対してインタビューで終わらずポスター発表・レポート・ディスカッション等の形式をとり続けたことで、思考力・判断力・表現力が身につく。

こうすればより高い効果が得られる方策など

校外の多くのひとにインタビューし、(感想録ではなく) 他者に説明するように表現する活動を継続的に入れておくことは、学生との協働的な学習においても有効だった。(実際、上記実践の他に、外部講師の講演会を多く行った。さらに、そのたびに聞き取りシートを工夫した。)

大学の学び方を高校に取り入れ、意欲を高めることは、高校生の意識の変容につながるであろう。学問の追究という大学のもつ資源を、高校3年間の総合的な学習の時間を使った授業とリンクさせた優れた実践といえる。3年間の計画は、発達段階を考慮し、進路情報として学びの体系化を意図して、無理なくたてられている。生徒のコメントからは、学問の探究心が深まっていく様子がみてとれる。こうした本質的な進路指導を行うことで大学進学の新たな意味づけが県内の高校に広がることになるであろう。